高齢者ステレオタイプにおける思考表出方法とステレオタイプ低減方略の関連性の検討

○木田 昌慶・竹原 卓真
(同志社大学大学院心理学研究科)

キーワード: ステレオタイプ, 筆記, ネガティブ感情

The relationship between the styles of expressing the elderly stereotypes in thought and a strategy for reducing stereotypes

Masanori Kida and Takuma Takehara

(Doshisha University Faculty of Psychology)

Key Words: stereotype, writing, negative affect

目的

ネガティブなステレオタイプは偏見感情や差別行動につながってしまうため避けるべきである。例えば高齢者には無能であるというステレオタイプが持たれているが、これは仕事場面などにおいて不利益を被る可能性がある。これまでの研究ではステレオタイプを低減させるための方略として代替思考を用いることが検討されてきた。しかし代替思考を用いた方略では元々帯びていたステレオタイプ度よりも低下させることは困難だった。本研究では筆記開示の方法を参考に、思考を抑制するのではなくむしろ表出させる方法によってネガティブなステレオタイプを低減させる方略を検討した。またステレオタイプ度とともに感情状態を測定する新たな方法にも挑戦し、感情状態の変化を測定することも目的とした。

方法

実験参加者 大学生71名(男性30名, 女性41名, 平均年齢 20.5 ± 1.31 歳)が, 参加した(統制条件23名, 抑制条件24名, 表出条件24名)。

実験計画 高齢者ステレオタイプ度の測定においては, 独立変数は記述課題における高齢者ステレオタイプに対する教示内容, 従属変数は対人認知課題の高齢者ステレオタイプ語に対する印象評定得点とする1要因3水準(統制条件, 抑制条件, 表出条件)の参加者間計画であった。感情状態においては, 先の教示内容×一般感情尺度測定のタイミング(参加者内要因; ベースライン, 測定1, 測定2)の混合計画であった。感情状態の測定には一般感情尺度(小川ら, 2000)を用いた。

手続き 田戸岡・村田(2010)を参考に2つのフェーズを構成した。参加者には2つの無関係な実験を行うと説明したが, 実際は一続きの実験であった。第1フェーズでは感情状態を回答させた(ベースライン)後, 高齢男性が駅の売店で働いている様子を記述させた(記述課題)。その際, ネガティブな高齢者ステレオタイプに関わる記述について, 抑制条件には絶対にしないように, 表出条件にはそれに基づいてするように教示を加えた。その後, 感情状態を回答させ(測定1), 第1フェーズを終了した。第2フェーズでは, 2つの実験が無関係であることを強調するために減算課題を行わせた後, 文章を読んでターゲット人物の印象評定を行う対人認知課題を行った。この文章は, ターゲット人物の無能な行動が, 環境あるいは特性によるものかが曖昧な文を含む計22文の文章であり, 田戸岡・村田(2010)を許可を得て使用した。その後, 参加者に現在の状態にあてはまる感情を回答させた(測定2)。

結果

分析対象者 指示に従わなかった参加者等を除く66名(統制条件23名, 抑制条件21名, 表出条件22名)を分析対象とした。

高齢者ステレオタイプ度 対人認知課題において, ターゲット人物が各評定語にどれほど当てはまるかを「1:全くあてはまらない~5:どちらともいえない~9:非常にあてはまる」で回答させ, 合算平均したものを評定高齢者ステレオタイプ

度とした。ただし回答時間がその評定語の平均値より $3SD$ 以上遅れた回答(12個, 全体の3.4%)は除外した。評定高齢者ステレオタイプ度に対して1要因分散分析を行ったところ教示内容の主効果は有意ではなかった。

感情状態 一般感情尺度におけるPA, NA, CA得点の各々8つの下位尺度に対して「0:全く感じていない~3:非常に感じている」の4件法で回答させた得点を合算した得点を従属変数とした。2要因(タイミング要因, 教示内容)の分散分析を行った結果, PA, NA, CA各得点のタイミング要因のみが有意となった(順に, $F(2, 126) = 27.79, p < .001$; $F(2, 126) = 21.63, p < .001$; $F(2, 126) = 10.70, p < .001$)。多重比較の結果, 得点の高い順に, PAではベースライン>測定2>測定1, NAでは測定1>ベースライン>測定2, CAでは測定1=ベースライン>測定2となった。図1にNA得点における平均値と標準偏差を示した。

考察

本研究では3つの教示内容について高齢者ステレオタイプ度に有意な差はみられなかったため, ネガティブな高齢者ステレオタイプを低減させる方略を示すことはできなかった。感情状態については教示内容による差は見られなかったが, 測定2において低下していたPA得点は上昇し, 上昇していたNA得点は低下した。特にNA得点についてはベースラインよりも測定2のほうが有意に低かったことから, ステレオタイプ対象について思考し記述することはネガティブ感情を低下させる方略として有効であった可能性が示唆された。今後は筆記開示の研究を参考に記述課題のトライアル数を増やし中・長期的にアプローチをすることで, ステレオタイプ対象への認知や感情が変化する可能性を検討すべきだろう。

引用文献

小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人(2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, 71, 241-246.

田戸岡好香・村田光二(2010). ネガティブなステレオタイプの抑制におけるリバウンド効果の低減方略: 代替思考の内容に注目して 社会心理学研究, 26, 46-56.

図1 NA得点における教示内容及び測定タイミングごとの平均値と標準偏差